

会計学(午前・管理会計論)

本試験

第 1 問

問題 2

～ 略 ～

課 長：「はい、今回は我が国の原価計算基準に従って、現実的標準原価を採用することにしました。ただ近年では、理想標準原価の意義と特徴を評価して、こちらを採用する傾向も現れてきております。」

経理部長：「なるほどそのような考え方もあるのだね。さて 4 月から生産を開始した甲製品だが、直接材料の価格差異はいくらになっているのだね。」

課 長：「はい、直接材料については、その購入時点で標準価格を適用する方法を採用することにしましたので、受入価格差異はそれぞれお示ししたとおりで、その総額は（ ① ）となっています。ただこれは特に異常なものではないと判断しております。」

経理部長：「それではこの差異は会計年度末にどのように処理されるのかね。」

課 長：「我が国の原価計算基準に従って、それは（ ② ）および（ ③ ）に配賦されることになっています。」

経理部長：「直接材料の消費数量差異はどうなっているのかね。」

課 長：「直接材料消費数量差異は、X 材料では（ ④ ）、Y 材料では（ ⑤ ）、Z 材料では（ ⑥ ）となっています。」

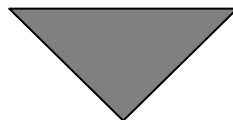
経理部長：「数量差異は更に原料歩留差異と（ ⑦ ）にも分析されるそうだね。」

課 長：「はい、そうです。また同様な手法で直接労務費差異を賃率差異と時間差異に区分し、その時間差異を労働能率差異と（ ⑧ ）に分析することができ、4 月の労働能率差異の金額は（ ⑨ ）であり、（ ⑧ ）の金額は（ ⑩ ）になっています。」

経理部長：「ではその（ ⑨ ）と（ ⑩ ）の差異分析はどのように理解すればよいのかね。」

～ 略 ～

問 1 文中（ ① ）～（ ⑩ ）に当てはまる最も適切な金額又は語句を記入しなさい。なお、金額については答案用紙の（ ）内に有利又は不利を明記しなさい。



## 論文グレードアップ答練 第1回

### 第1問

**問題2** 当工場では、工程始点で投入した直接材料を直接工が加工することで製品Zを生産しており、原価管理のためにパーシャル・プランの標準原価計算制度を採用している。以下の〔資料〕に基づき、**問1**～**問4**に答えなさい。

#### 〔資料〕

##### 1. 製品Zの原価標準（一部抜粋）

直接材料費	(標準価格)	(標準消費量)	
	@4,000円	× 10kg	40,000円
直接労務費	(標準賃率)	(標準作業時間)	
	@2,400円	× 5時間	12,000円

～ 略 ～

##### 2. 生産データ

	前月	当月
当月投入	2,100個	2,400個
仕損品	300個	600個
完成品	1,800個	1,800個

(注) ① 月初および月末に仕掛在庫は存在しない。  
② 完成品と仕損品の重量は標準通りである。

##### 3. 原価データ（一部抜粋）

	前月	当月
直接材料費	@4,000円×21,400kg	@3,500円×26,400kg
直接労務費	@2,400円×11,000時間	@2,100円×13,800時間

(注) ① 前月、当月ともに、各材料の実際価格はその標準価格と一致していた。  
② 前月、当月ともに、各工員の実際賃率はその標準賃率と一致していた。

**問1** 当工場の原価計算担当者は、仕損品の標準発生量を以下のように計算した。この計算の問題点を説明しなさい。

#### 〔原価計算担当者の計算〕

前月：当月投入 2,100 個×仕損品標準発生率 10%＝210 個

当月：当月投入 2,400 個×仕損品標準発生率 10%＝240 個

**問2** 前月と当月の直接材料費差異を価格差異、仕損差異、減損差異に分析しなさい。答案用紙の( )には有利差異であれば「有」、不利差異であれば「不」と記入しなさい。

**問3** 前月と当月の直接労務費差異を賃率差異、仕損差異、労働歩留差異、労働能率差異に分析しなさい。答案用紙の( )には有利差異であれば「有」、不利差異であれば「不」と記入しなさい。

**問4** 当工場では、前月と当月の原価差異について検討を行うこととした。

(1) 前月から当月にかけて仕損差異が増加した原因を推測しなさい。

(2) 前月から当月にかけて減損差異と労働歩留差異が増加した原因を推測しなさい。